

## 新聞学科創立75年小史

### 新聞学科：1982～2006年

新聞学科75年の歴史については『上智大学新聞学科五十年の記録』が創立50周年記念として1981年に刊行されている。また新聞学科同窓会からも同窓会創立30周年記念誌として『新聞学科同窓会三十年の歩み』（1992年12月）が刊行されているほか、会報を編纂した『同窓会会報no.3-45合本』（2001年12月、その後50号＝2004年まで発行されている）もあり、学科75周年のオーラルヒストリーはそちらを参照されたい。

以下、創立60年を迎えた機に本誌第22号に掲載された「新聞学科創立60年 過去10年間（1982～91年度）を振りかえる」（武市英雄）に補筆修正を加え、1982年度から2006年度まで記録として掲げておく。年度ごとにおおよそ人事、教科、大学院関係を含む新聞学科の小史である。

なお、1992年度以降の客員研究員、開講科目の変更、学位授与（課程博士・論文博士）などについては本誌の該当号を参照されたい。

（鈴木雄雅）

#### 1982～1991年度

「新聞学科創立60年 過去10年間（1982～91年度）を振りかえる」

（武市英雄）

上智大学文学部新聞学科はことし（1992年）創立60年になる。本学科の前身である専門部新聞科の開設が文部省によって認可されたのが1931（昭和6）年12月1日で、翌32（昭和7）年4月1日から、定員50名で開設された。主任は小野秀雄教授である。戦後、学制改革によって専門部新聞科は1948（昭和23）年、文学部新聞学科に変わり、1971（昭和46）年4月には大学院文学研究科に新聞学専攻専攻の修士課程（定員10名）が新設され、川中康弘教授が主任になった。さらに、1974年4月からは博士課程（定員3名）が設けられ、ここに、学部・大学院を通したジャーナリズムの一貫教育・研究体制が整った。

本学科としては1981年12月、文部省認可から50年に当たる年を記念して『上智大学新聞学科五十年の記録』を出版した。その中で、50年間の新聞学科の歴史が記されているので、本稿ではその後の10年間（1982年～1991年度）の

鈴木雄雅

学科史を概観したい。

その前に多少のだぶりをもたせるために、1981年の学科史にふれる。1981年3月31日をもって小糸忠吾教授が退職、11月21日には本学で日本新聞学会（現日本マス・コミュニケーション学会）の秋季研究発表大会が開催された。翌12月4日には新聞学科設立50周年記念祝賀会が学内で開かれ、『上智大学新聞学科50年の記録』が刊行された。翌5日には卒業生たちを講師として記念講演会が開かれ、続いて在學生、卒業生、教職員がつどう記念祝賀会が開かれた。

1982年以後の学科の動きをメモするとおおよそ次の通りである。

#### [1982（昭和57）年度]

- ▽ 3月31日をもって何初彦教授が退職。何教授は昭和20年代から非常勤講師として上智で雑誌論や映画論を担当して下さった方で、東京大学新聞研究所教授を退官後、1972（昭和47）年から上智へ専任の教授として移られた。専任になられてから「雑誌論」「映画論」のほかに「広告論」「時事問題研究特殊Ⅰ（国内）」といった科目を担当。ニューメディアの登場に合わせて「コミュニケーションと技術」と題する科目を新たに開講した。その他本学では図書館長なども務められた。（コミュニケーション研究13号）
- ▽ 4月1日 三好崇一教授が就任。三好教授は1949年3月東京大学経済学部卒業後朝日新聞社に入社。経済部次長、香港支局長、『朝日ジャーナル』副編集長を経て70年から論説委員（経済担当）、76年から論説副主幹、翌77年から*Japan Quarterly*の編集長も兼ねた。上智へ移られてからは「マス・メディア論」「アジア・オセアニアのマス・メディア」「時事問題研究特殊Ⅰ（国内）」「演習」ほか大学院科目などを担当。（コミュニケーション研究第25号）

#### [1983（昭和58）年度]

- ▽ 4月からホセ・デベラ教授が学科長。10月から山本透教授が専攻主任。武市英雄教授が『ソフィア』編集長に就任（～86年3月）。

#### [1984（昭和59）年度]

- ▽ 4月1日 鈴木雄雅専任講師が就任。鈴木講師は1975年本学科を卒業後、大学院新聞学専攻修士課程を修了、博士課程に在学中オーストラリアのシドニー大学大学院へ約2年間留学、82年3月上智大学新聞学専攻博士後期課程を修了した。「演習Ⅰ（新聞）」「外国ジャーナリズムⅡ（ヨーロッパ

のマス・メディア)」などを担当。

- ▽ カリキュラムの一部手直しがあり、「国際コミュニケーション論」を2年次の必修科目とし、その各論として、従来「アジア・オセアニアのマス・メディア」などと名づけていた専門科目B群の地域別マス・メディア論を「外国ジャーナリズムI、II、III」と名称がえした。Iはアジア、IIはヨーロッパ、IIIは米州のそれぞれのマス・メディア論とすることになった。さらに専門科目C群の「報道英語」と「論説英語」は「報道英語I」「同II」とすることにし「英文、独文、仏文の各ジャーナリズム」は廃止した。

#### [1985 (昭和60) 年度]

- ▽ 4月から新聞学科長に山本透教授（～89年3月）。専攻主任に三好崇一教授（～87年3月）。
- ▽ デベラ教授が後期、特別研修（85年9月1日～86年3月31日）。
- ▽ 「テレビ制作II」でアナウンス講座を行う。

#### [1986 (昭和61) 年度]

- ▽ 武市英雄教授が学事部長に就任（～89年3月31日）。
- ▽ 専門科目E群の「PR論」が「広告論」の中に組み込まれることになった。他学部・他学科開講科目について20単位まで選択できたのを、12単位までの充当にした。

#### [1987 (昭和62) 年度]

- ▽ 専任主任にホセ・デベラ教授（～89年3月31日）。
- ▽ 渡邊薫助教授が特別研修（～88年3月31日）。
- ▽ この年から4年生の卒業論文の面接を実施、主査、副査の二人の教員が担当。

#### [1988 (昭和63) 年度]

- ▽ 三好崇一教授が特別研修（～89年3月31日）。
- ▽ 11月25日、大学創立75周年の記念国際シンポジウム「ジャーナリズム教育の現状と課題～アジア諸国の実情をふまえて」を10号館講堂で開催。中国、韓国、フィリピン、タイのアジア4カ国からパネリストを招聘し、デベラ教授が司会で各国のジャーナリズム教育の現状紹介や問題点の対論が行われた。（コミュニケーション研究第19号）
- ▽ 学科として二人の客員教授を迎えた。一人は韓国外国語大学の金政起教授、もう一人は中国人民大学の方漢奇教授。

鈴木雄雅

[1989 (平成元) 年度]

- ▽ 4月1日より渡邊薫助教授が教授に、鈴木雄雅専任講師が助教授にそれぞれ昇任。
- ▽ 春原昭彦教授が学科長（～91年3月31日）。専攻主任にホセ・デベラ教授（～93年3月31日）。武市英雄教授が特別研修（～90年3月31日）。
- ▽ 4月1日 植田康夫助教授が着任。植田助教授は1962年本学科を卒業後、株式会社読書人編集部に入社、『週刊読書人』の編集に27年間たずさわった。82年に同紙編集長、85年には取締役編集部長に就任。本学科へは79年4月から非常勤講師として「出版論」「雑誌論」を担当。専任教員就任後は同科目のほかに「演習Ⅰ（新聞）」などを担当。
- ▽ 春原昭彦教授、日本新聞学会22期会長に（1989年5月～91年5月）。
- ▽ 中国人民大学新聞系副主任・鄭超然教授が客員教授として滞在（6月1日～6月30日）。
- ▽ 紀要『コミュニケーション研究』創刊20号を発行（90年3月）。

[1990 (平成2) 年度]

- ▽ 5月 韓国言論学会「近代化におけるジャーナリズム」に春原昭彦教授、武市英雄教授、鈴木雄雅助教授が報告者として参加。日本マス・コミュニケーション学会・韓国言論学会の日韓シンポジウムの前身となる。
- ▽ 新聞学専攻第1号の博士号申請者・孫琪剛氏の論文審査・試験が91年1月23日に行われ、合格の判定が下された。孫氏の論文は「相互説得コミュニケーションに関する研究一中・台相互報道とその効果の分析から」。主査は山本透教授、副査は三好崇一教授、春原昭彦教授、リンダ・グローブ教授（比較文化学部）と宇野重昭教授（成蹊大学法学部）。（コミュニケーション研究第21号）

[1991 (平成3年) 年度]

- ▽ 4月から武市英雄教授が学科長（～93年3月31日）。
- ▽ 春原昭彦教授が特別研修（91年10月1日～92年3月31日）
- ▽ 10月 日本マス・コミュニケーション学会による中国社会科学院新聞研究所「訪日考察団」（所長・団長 孫旭培）の招聘窓口、協力を行った。（コミュニケーション研究第22号）
- ▽ 92年1月16日 7号館14階特別会議室で山本透教授の最終特別講義（新聞学科の皆さんに）が行われた。（コミュニケーション研究第22号）

- ▽ 92年3月31日、山本透教授退職。

## 1992～2006年度

### [1992（平成4）年度]

- ▽ 鈴木雄雅助教授が特別研修（～93年3月まで）
- ▽ 4月1日 石川旺教授が着任。石川教授は1966年3月早稲田大学政治経済学部経済学科を卒業、68年6月米国ミシガン州立大学コミュニケーション学部修士課程を修了（MA）。70年NHKに入局。放送文化研究所に配属、番組研究部、放送学研究室に勤務、87年主任研究員になった。主として「コミュニケーション論」「放送論」（学部・大学院）ほか演習などを担当。
- ▽ 非常勤講師として長年勤めて下さった「論文作法Ⅱ、Ⅲ」の中沢道明先生（読売新聞社）と「報道英語Ⅱ」の仁井田益雄先生（共同通信社）が3月31日付けで退職。

### [1993（平成5）年度]

- ▽ 4月から植田康夫教授が学科長（～95年3月）、石川旺教授が専攻主任に（93年10月～97年9月）
- ▽ 学制改革に伴い、カリキュラム一部改革（「報道英語Ⅰ」、「同Ⅱ」＝選択必修D群から3、4年生必修へ、選択必修群はA・B・C群制に）
- ▽ 12月12日 ホセ・デベラ教授の最終講義（テクノロジーの評価）が7号館14階特別会議室にて行われた。（コミュニケーション研究第24号）
- ▽ 94年3月31日 ホセ・デベラ教授退任、上智大学名誉教授に。

### [1994（平成6）年度]

- ▽ 4月1日 渡邊薫教授、特別研修（～95年3月）。音好宏専任講師が着任。音講師は琉球大学経済学部卒業後、本学大学院博士後期課程新聞学専攻を修了し、日本民間放送連盟研究所勤務。「演習Ⅰ（テレビ）」「人間行動とマス・メディア」などを担当。
- ▽ 10月23、24日 日本マス・コミュニケーション学会主催の国際シンポジウム「東アジアにおける情報流通」を学内で開催。（日本マス・コミュニケーション学会＝国際シンポジウム実行委員会編『変貌する放送と通信 東アジアにおける情報流通』学文社、1996年）
- ▽ 95年3月 1967年から「広告論」（学部・院隔年開講）を担当して下さった百瀬伸夫講師（電通）が退任。

鈴木雄雅

[1995（平成7）年度]

- 4月から渡邊薫教授が学科長に（～97年3月）
- ▽ 10月1日 藤田博司教授（共同通信社論説副委員長）が着任。
  - ▽ 95年1月17日 三好崇一教授の最終特別講義（ジャーナリストへの志を大切に～新聞学科に言い残したいこと～）が行われた。（コミュニケーション研究第25号）
  - ▽ 96年3月31日 三好崇一教授退任。

[1996（平成8）年度]

- ▽ 鈴木雄雅助教授、教授に昇任。
- ▽ 「報道英語Ⅱ」（4年次）必修化（～01年度）

[1997（平成9）年度]

- 4月から 鈴木雄雅教授が新聞学科長（～99年3月）、植田康夫教授が専攻主任（92年10月～99年3月）、武市英雄教授が文学研究科委員長に就任（～2001年3月）
- 8月 新聞学科同窓会による第5回卒業生名簿が発行される。
- ▽ 98年1月17日 春原昭彦教授の最終講義（新聞学科人群像—もう一人の新聞人）が図書館9-211教室で行われた。（コミュニケーション研究第28号）
  - ▽ 98年3月31日 春原昭彦教授退職、名誉教授に。

[1998（平成10）年度]

- ▽ 4月1日 金山勉専任講師、着任。金山講師は山口大学（西洋）卒。テレビ山口のニュースキャスターを経て、米国オハイオ大学大学院でPh.D（テレコミュニケーション）を取得。「テレビ制作」「報道英語」などを担当。
- ▽ 入試制度改革 イエズス会高校枠廃止 推薦枠18名（指定校14名、公募4名）となる。
- ▽ 99年1月30日 渡邊薫教授の最終講義（第一の人生を終えて第二の人生へ）が3号館311教室で行われた。（コミュニケーション研究第29号）
- ▽ 99年3月31日 渡邊薫教授退任。

[1999（平成11）年度]

- ▽ 4月から藤田博司教授が学科長、植田康夫教授が専攻主任に（～01年3月）。音好宏講師が助教授に昇任。武市英雄教授が日本マス・コミュニケーション学会27期会長に（99年6月～01年6月）。
- ▽ 4月1日 田島泰彦教授が着任。田島教授は上智大学法学部出身。早稲

田大学大学院後期課程修了（法学）から神奈川大学短期大学部教授を経て、本学へ。「マス・メディア論」「マスコミ倫理法制論」（学部・大学院）ほか「演習」などを担当

- ▽ 鈴木雄雅助教授が特別研修（99年10月1日～00年9月30日）
- ▽ 選択必修科目B群外国ジャーナリズムⅡⅢの3科目を、半期2単位6科目に分割。
- ▽ テレビ東京寄附講座として「ジャーナリズム特殊Ⅰ」を開講した。

#### [2000（平成12）年度]

- ▽ 音好宏助教授が特別研修（00年10月1日～01年9月30日）
- ▽ 植田康夫教授が日本出版学会会長に（～現在）
- ▽ 石川旺教授が大学院新聞学専攻から初の論文博士号を授与される
- ▽ 武市英雄教授、上智大学社会正義研究所所長に（～02年）
- ▽ ジャーナリズム研究所構想発表
- ▽ 卒業単位を136単位から134単位とする。「報道英語Ⅰ、Ⅱ」選択必修科目へ。

#### [2001（平成13）年度]

4月1日 石川旺教授が学科長、鈴木雄雅教授が専攻主任に（～03年3月）  
金山勉講師が助教授に昇任。

- ▽ 大学院課程創立30周年（コミュニケーション研究第34号）
- ▽ 5月12日 日本マス・コミュニケーション学会／韓国言論学会共催・第9回国際シンポジウム「マス・コミュニケーション教育を考える」を7号館特別会議室ほかにて開催。（同窓会会報46号）
- ▽ 推薦入試枠見直し、18名（指定校4名、公募14名）
- ▽ 全学共通科目10単位減などによるカリキュラム変更に伴い、卒業単位134単位から124単位に。「情報リテラシー演習」（1年生）を新設。
- ▽ 新聞学科公式サイト <http://www.info.sophia.ac.jp/sophiaj/> 開設
- ▽ 02年1月17日 武市英雄教授の最終講義（ニュースの変遷をたどってー私とニュースとの出会いー）が行われた。（コミュニケーション研究第32号）
- ▽ 02年3月31日 武市英雄教授退職、名誉教授に。
- ▽ 「論文作法Ⅱ、Ⅲ」担当の森脇逸男講師（読売新聞社）が退任。

#### [2002（平成14）年度]

鈴木雄雅

4月1日 橋場義之教授（毎日新聞社）、着任。橋場教授は1971年早稲田大学（政経学部）卒業後、毎日新聞社入社。東京本社、西部本社社会部、メディア面などを担当のほか、「開かれた新聞委員会」事務局なども務めた。「時事問題研究」「新聞論」「報道論」などを担当。

▽ 植田康夫教授、特別研修（02年10月1日～03年9月30日）。

▽ 朝日新聞社寄附講座「ジャーナリズムの現在」始まる（～05年度）。

▽ 選択必修C群-II「報道英語」A、Bクラス（選択）制実施

[2003（平成15）年度]

4月1日 田島泰彦教授が学科長、石川旺教授が専攻主任に（～05年3月）。阿部るり嘱託講師、着任（～05年度）。藤田博司教授、特別契約教授に（～05年3月31日）。

▽ 推薦入試枠見直し、18名（推定校8名、公募10名）。

[2004（平成16）年度]

▽ 金山勉助教授、特別研修（4月1日～05年3月31日）

▽ 05年1月22日 藤田博司教授の最終講義（アメリカ・ジャーナリズム・大学）が行われた。（コミュニケーション研究第35号）

[2005（平成17）年度]

▽ 石川旺教授が特別研修（～06年3月）。鈴木雄雅教授、文学研究科委員長に就任（～現在）。春原昭彦名誉教授、日本マス・コミュニケーション学会名誉会員に。

▽ 4月1日 学科長に橋場義之教授（～07年3月）、鈴木雄雅教授（～05年4月）、田島泰彦教授が専攻主任に（05年5月～06年3月）。

▽ 1974年から「論文作法I」を担当してくださった仙名紀講師が退任。

[2006（平成18）年度]

▽ 田島泰彦教授、特別研修（～07年3月）。

▽ 4月1日 阿部るり講師が専任講師に、鈴木雄雅教授が専攻主任に（～現在）。

▽ 毎日新聞社寄附講座「ジャーナリズムの現在」始まる。

▽ 11月12日 学科創立75周年シンポジウム「グローバルizmとの進展とアジアのジャーナリズム」を10号館講堂で開催、中国、韓国からパネリストを招聘、終了後記念祝賀会が開かれた。

〈資料〉

## 新聞学科卒業生数

年	男	女	合計	年	男	女	合計
1935 (昭10)	34	—	34	1964 (昭39)	26	16	42
1936 (昭11)	5	—	5	1965 (昭40)	37	8	45
1937 (昭12)	8	—	8	1966 (昭41)	41	12	53
1938 (昭13)	13	—	13	1967 (昭42)	33	15	48
1939 (昭14)	14	—	14	1968 (昭43)	24	18	42
1940 (昭15)	14	—	14	1969 (昭44)	30	13	43
1941 (昭16)	25	—	25	1970 (昭45)	38	9	47
1942 (昭17)	6	—	6	1971 (昭46)	39	7	46
1943 (昭18)	15	—	15	1972 (昭47)	32	15	47
1944 (昭19)	23	—	23	1973 (昭48)	25	13	38
1945 (昭20)	7	—	7	1974 (昭49)	31	22	53
1946 (昭21)	11	—	11	1975 (昭50)	35	20	55
1947 (昭22)	27	—	27	1976 (昭51)	30	26	56
1948 (昭23)	45	—	45	1977 (昭52)	26	23	49
1949 (昭24)	32	—	32	1978 (昭53)	32	26	58
1950 (昭25)	24	—	24	1979 (昭54)	29	23	52
1951 (昭26)	4	—	4	1980 (昭55)	32	22	54
1952 (昭27)	5	0	5	1981 (昭56)	30	32	62
1953 (昭28)	19	0	19	1982 (昭57)	59	19	78
1954 (昭29)	16	0	16	1983 (昭58)	31	34	65
1955 (昭30)	22	0	22	1984 (昭59)	39	26	65
1956 (昭31)	36	0	36	1985 (昭60)	29	34	63
1957 (昭32)	41	0	41	1986 (昭61)	45	36	81
1958 (昭33)	37	0	37	1987 (昭62)	32	27	59
1959 (昭34)	48	0	48	1988 (昭63)	33	44	77
1960 (昭35)	50	0	50	1989 (平元)	30	43	73
1961 (昭36)	40	0	40	1990 (平2)	32	23	55
1962 (昭37)	39	1	40	1991 (平3)	42	33	75
1963 (昭38)	49	9	58	1992 (平4)	27	46	73

年	男	女	合計	年	男	女	合計
1993 (平5)	28	40	68	2001 (平13)	33	45	78
1994 (平6)	33	34	67	2002 (平14)	23	39	62
1995 (平7)	20	34	54	2003 (平15)	27	50	77
1996 (平8)	30	42	72	2004 (平16)	25	48	73
1997 (平9)	32	28	60	2005 (平17)	19	33	52
1998 (平10)	23	28	51	2006 (平18)	19	48	67
1999 (平11)	30	35	65	計	2,044	1,241	3,285
2000 (平12)	24	42	66				

・ 専門部新聞科を含む

## 新聞学科カリキュラムの変遷

いまでは、新聞学科と大学院新聞学専攻の講義概要（カリキュラム）は、大学サイト（<http://www.sophia.ac.jp/>）（<http://www.info.sophia.ac.jp/sophiaj/>）から容易に見ることができる。1990年代以降の大学改革の流れのなかで、複数が授業を担当する科目や限定の新科目も設置された。

そうした中で、新聞学科は創立40年を迎えた1970年代以降、若干の手直しがあるにしても、おおよその分類（科目群）は変わらない。76年度から新聞学科の定員数は10名増えて60名となったが、2006年度は専任8名、非常勤講師十数名の体制で、学科開講科目数は、卒論を含めての必修が12、選択必修、選択科目は30余りと文学部のなかでも選択肢が広い。2001年度から一年生の必修科目に「演習 情報リテラシー」が加わり、03年度から学科専任教員が担当している。01年度から全学共通科目（旧一般教育科目）の取得単位数が10単位とかつてに比べて激減したが、朝日新聞社、毎日新聞社からの寄付をうけて「ジャーナリズムの現在」（02年度から）が設置されている。さらにジャーナリズム教育のなかでジャーナリスト教育の必要性を議論しつつ、関係者（社）の協力をうけながら、学生のインターンシップを働きかけている。

必修科目の設置や卒業単位数の削減は、文部科学省の意向を受けての結果である。学生が卒業に必要な総単位数（学科によって違いがある）が、長い間四年間で136単位だったのが、01年度入学者から124単位と激減した。07年

度からのセメスター制完全移行を受けて春、秋学期2単位科目が増えつつあるが、これまでの時代を先取りした科目から時代のニーズにあわせた科目の新設・廃止が行われるであろうし、寄附講座の増加は現場と特定の研究テーマを主に扱うという趣旨のもとに作られた「ジャーナリズム特殊Ⅰ」「同Ⅱ」（「政治」「経済」「ジェンダー」「写真」「科学ジャーナリズム」「ルポルタージュ」など）の性格を変えつつある。

そうしたなかで、1973～76年度と短い期間ではあったが、A.G.モリナ専任講師が開講した「教会とコミュニケーションⅠ」「同Ⅱ」は上智大学、新聞学科らしい科目であった。

（鈴木雄雅 同窓会会報第49号＝2003年掲載の一部を加筆修正）

## 新聞学科と学会活動

上智大学新聞学科を創立した小野秀雄名誉教授が1951（昭和26）年、日本新聞学会の発足に尽力されたことはよく知られている。その後定員60名、スタッフ8名前後という小所帯ながら新聞学科から春原昭彦教授、武市英雄教授が会長を務め、春原教授と山本透教授が総務担当理事として学会活動の牽引役を果たしてきた。昨年度からその総務担当理事を仰せつかり、新聞学科と学会活動について少し記録に残しておく。

### 新聞学科と日本新聞学会五十年

二年前、すなわち2001（平成13）年には学会創立五十周年を記念し、『日本マス・コミュニケーション学会五十年史』を刊行した。既に三十年史が1981年に刊行されていたが、このときの総務担当が山本透教授。本学で秋季大会を開催そして新聞学科五十年の記録と同時進行する激務で、まだ私が大学院生としてお手伝いしたことを覚えている。

学会創立から四十年目。1991年名称が「日本マス・コミュニケーション学会」に代わった地盤づくりに尽力されたのは春原昭彦会長時代（1989-90年度）であった。そして今回の『五十年史』では計らずとも、編集委員会委員長の職責を与えられ、前任者及び編集委員会のご努力を成果として公刊できたことはありがたいことである。

その際、旧・現職の新聞学科スタッフ、院生、卒業生が理事、委員としてあるいは年に二回開催される大会運営、シンポジウム、報告発表、研究会開

鈴木雄雅

催などで学会の発展に寄与してきた歴史を垣間見ることができた。かつては学部生も少なからず学会員としてアカデミニズムの世界に近いところにいたが、現在では新聞学専攻に在学中の院生が『マス・コミュニケーション研究』（旧・新聞学評論）の公募論文に投稿するなど、アカデミックへの登竜門として日本マス・コミュニケーション学会は新聞学科と密接な関係にある。

#### 学会活動に上智生が活躍

さて、昨年（2004年）から総務担当理事として学会活動の中枢に入っているが、最初の大きな仕事が学会本部・事務局の移転作業であった。創立準備に段階では小野先生の自宅にしたという本部・事務局も、以後先生が奉職された東京大学新聞研究所（社会情報研究所を経て、現東京大学大学院社会情報学環・学際情報学府）に五十年以上置かれたが（会則第2条）、同所の部局併合という諸般の状況から移転が急務となり、昨年9月現会長校の十文字女子大学へ移したのである。小野先生が始めた新聞学の本拠を五十年後に私に移すことになるとは思わなかった。

また昨年は韓国言論学会との国際交流による日韓シンポジウムを日本側が開催する年となり、9月中旬「イラク戦争とジャーナリズム」というテーマの下、法政大学市ヶ谷キャンパスに韓国側からの二十人近い学者・研究者を含め百人以上が参加し、好評を博した。そのシンポジウム運営で大学院韓国人留学生が翻訳・通訳をはじめ多大な力を発揮し、内外の参加者に印象付けたことは大変喜ばしい。実はこの十年以上も続く日韓シンポジウムもその歴史は春原会長時代に遡る。学生時代さまざまの形で応援してくれた記憶を持つ卒業生もいるだろう。

1月には中国のマス・コミュニケーション学会との交流を図るために会長と同行して上海へでかけた。その地で声をかけてくれる中国人研究者のひとりに吾信訓教授がいた。吾教授は上海大学で新聞学を教えているが、かつて大学院研究生で学んだひとりである。また同地の日系企業にも複数名の大学院修了者が勤務しており、久しぶりに旧交を温めた。

（鈴木雄雅、同窓会会報第50号＝2005年掲載を一部を加筆修正）